

早春の水

布宮慈子^{やすこ}

城跡の土手に見つけしフキノタウ春の証のやうに咲きたり

梅園と呼ぶほどはなき梅の木の咲き始めのよし白梅香る

思い切つて出てきて城址公園に梅を見てゐる飽きるまでを

数人がウインドブレーカーを着て歩くのみなり霞城公園^{かじやう}

公園の博物館の裏手には陽だまりあれど野良猫をらず

野良猫に先に会つたは一年前か無事に冬を過ごしただらうか

三年の記憶とふものあやふやに疲れ果てたるマスクがひとつ

梅の香をわづか体に残しつつお濠を渡りこの世に帰る

目立たない鴨らは淵にじつとして石のごと見ゆ早春の水

冬の日にお濠の土手に飛んできし翡翠^{かはせみ}の色おもひて歩く